



Ashiya
City
Museum
of
Art &
History

News Letter 2024.03

芦屋市立美術博物館

美博だより



蟻田 哲〈UNTITLED〉
1984年 油彩・布
193.0×213.0cm

環状体やブロック状の抽象形体を大画面に描き出す蟻田の絵画は、絵具の質感と重厚な色彩によって、具象と抽象の垣根を超えるような、強い存在感を放ちます。

大阪に生まれた蟻田は幼少期に芦屋へ転居、高校卒業後1966年に渡米します。ロードアイランド・スクール・オブ・デザインで学び、1984年よりニューヨークで作家活動に専念します。1991年に東京ステーションギャラリーで日本における初めての個展を開催、同年に第23回日本芸術大賞を受賞。1993年に当館で個展を開催、これを機に作品2点を収蔵しました。現在はイタリアを拠点に活動する蟻田の本作は、2024年春のコレクション展で展示します。

1

館蔵品紹介 1,8

展覧会報告 2-4

学芸員コラム 5

- 芦屋の美術、もうひとつの起点 —伊藤継郎
- 最後の浮世絵師 月岡芳年
- art resonance vol.01 時代の解凍
- 第41回 芦屋市造形教育展
- 第67回 芦屋市展

● 歴史資料展示室常設展

特別展関連展示「国芳一門の浮世絵師たち」

小企画展示「ちょっとむかしのくらし展—昭和の生活用品たち—」

- 具体美術協会／芦屋
- 画家と詩人の沖縄旅行
—伊藤継郎《沖縄デッサン》をめぐって
- 芦屋廃寺の基壇

芦屋の美術、もうひとつの起点

—伊藤継郎

2023/4/15～7/2

芦屋の地で描き続けた洋画家・伊藤継郎（1907-1994）の、没後初となる大規模な個展。改修工事による長期休館後の最初の展覧会として、芦屋の美術の中心的存在であった伊藤と、同時代の芦屋および関西の美術界に焦点を当てた。約80点の伊藤作品と併せ、小磯良平や吉原治良ら、伊藤が交流をもった20名の画家たちの作品を展覧した。

伊藤は大阪の画塾で学び、1928年に芦屋へ転居しアトリエを構える。複数の美術団体展に出品して研鑽を積んだのち、1941年に新制作派協会（現・新制作協会）へ入会、以降の発表拠点とした。彼の画業を追う形で「Ⅰ 学び 一大阪の洋画界を背景に」、「Ⅱ 研鑽 一美術団体での活躍」、「Ⅲ 開花 一新制作派協会」、「Ⅳ 再出発 一芦屋の地で」の4章を設け、第5章を「伊藤絵画の内実」とし、身近なモチーフを絵具の豊かな質感とともに描いた伊藤作品に、制作上の観点から迫った。また、伊藤旧蔵アルバムをはじめ関連資料も多数展示し、伊藤の人柄や交友関係に触れていただくことを目指した。本展には、伊藤の絵画教室に通っていた生徒が多く来館し、当時を懐かしく感じていただくとともに、伊藤を知らなかった方々にも、その存在を知り作品に親しんでいただくことができたと考える。

関連イベントとして、神戸市立小磯記念美術館の廣田生馬氏による講演会「新制作派協会の戦前・戦中・戦後 一創立期会員、神戸・阪神間の会員の歩みとともに」や、伊藤の孫でアーティストの吉村有子氏による「継郎先生の絵画教室—静物画を描こう!」ほか、学芸員による動物園スケッチ会、模写ワークショップやギャラリートークを開催した。

（川原百合恵）



展示風景 第1展示室



展示風景 第2展示室

2

最後の浮世絵師 月岡芳年

2023/7/22～10/9

江戸時代末から明治時代にかけて活躍した浮世絵師である、月岡芳年の作品を数多く紹介した展覧会。

月岡芳年は、1839年に江戸の新橋に生まれ、12歳の時に歌川国芳に入門、15歳で画壇デビューした。22歳頃から本格的に浮世絵師として活動をはじめ、54歳で没するまでに数多くの作品を世に出した。

本展覧会では、芳年が全盛期から晩年にかけて手がけた『風俗三十二相』や『月百姿』などの作品150点を展示した。それらの作品を「武者絵」「歴史絵」「続物」「美人画」「報道」「月百姿」の6章に分けて紹介した。

芳年は28歳の時に「血みどろ絵」の代表作である『英名二十八衆句』を兄弟子である落合芳幾と手がけた。その絵のインパクトの強さから芳年は残酷な絵を好んで描いていたというイメージが先行していた。だが、その画風は画業の中でも最初期のわずかな期間のものだった。出品作品にも過激な描写のものは少なく、静謐な描写のものが多数となった。芳年という人物が過激な内容や描写のみが目立つだけの浮世絵師ではないことを本展覧会を通して紹介した。

関連イベントとして、浮世絵研究者の神谷浩氏や菅原真弓氏による講演会、尺八の大師範である加納煌山氏による尺八吹奏体験のワークショップ、ピアニスト木田陽子氏による月をテーマとした楽曲のコンサート、学芸員による展示解説を行った。

（山本剛史）



展示風景



コンサートの様子

art resonance vol.01

時代の解凍

2023/10/28～2024/2/4

本展では、関西を拠点に国内外で活動する、藤本由紀夫、高橋耕平、野原万里絵、黒田大スケの4名が、当館のコレクションから注目する作家を選び、創作者としての視点をもって、山崎つる子たち7名の思考や手業に近づきながら多様な方法でアプローチし、新たな作品解釈と共にこれまで表には出ていなかった個人史をも浮かび上がらせてくれた。藤本は、山崎つる子の《作品》(1964)を手掛かりに様々な角度から検証し、具体美術協会という枠を超えて山崎の世界の新しい発見を試みた。野原は、生涯にわたり約5,000点もの絵画を遺した山田正亮に注目し、山田の50冊以上に及ぶ『制作ノート』を手立てに、本質的な絵画への問いと「描く」という山田の思考を、制作という行為を通して導き、抽象絵画の新しい鑑賞方法を提示した。高橋は、人や作品、時代とのつながりを「対話」という形で拡張していった津高一の活動から、現代における「対話」について考察し、津高が抽象絵画を描くに至る経緯や精神性などを検証した。黒田は、堀内正和、柳原義達、エミール＝アントワーヌ・ブールデルの3名の彫刻家とあわせて、田中敦子に注目し、アーティスト本人や周囲の人々の言葉を通して、歴史的背景とともに各作家像に迫った。会期中は出展作家によるアーティストトークやワークショップのほか、ガイドスタッフによる鑑賞サポートや学芸員による解説ツアーなどを開催した。

(大槻晃実)



展示風景 藤本由紀夫／山崎つる子



展示風景 高橋耕平／津高一

第41回 芦屋市造形教育展

2024/2/10～2/18

芦屋市内の就学前施設、小学校、中学校の子どもたちの作品を、全館にわたり展示。のびやかで楽しい作品、発想にオリジナリティがあふれる作品、確かな技量で丹念に制作された作品などが一堂に展示され、会期中は作者である子どもたちとその家族らで賑わった。



展示風景

第67回 芦屋市展

2024/3/5～3/24

1948年の第1回から「何人でも随意に応募することができます」と、応募者の年齢や居住地域などを限定しないことが特徴の公募展。創立当初から具体美術協会のリーダー吉原治良や新制作派協会の伊藤継郎、写真家の中山岩太やハナヤ勘兵衛らが審査に携わり、表現の新しさや独創性を大切に、多くの作家を輩出してきた。世代や表現の垣根を超えた交流の場、新しい表現が生まれる場となることを目指して開催。

(山本剛史)



第66回 芦屋市展 展示風景

歴史資料展示室常設展

各展覧会に準ずる

2023年4月から常設展示としてリニューアルした。
1章から4章は下記の章立てとなっている。

1章「芦屋ってどんなまち？」

芦屋市全体の地形や地名の由来、市木や市花を紹介

2章「あしやを育んだ自然」

芦屋市の地理的特徴である花崗岩や芦屋川について紹介

3章「住宅都市あしやの幕開け」

かつて農村だった芦屋が住宅都市となるまでの
歴史の流れを紹介

4章「輝ける古代の芦屋」

金津山古墳や芦屋廃寺などの市内に存在する
遺跡について紹介

5章は「企画展示スペース」となっており、開催中の特別展や
時事的な話題に関連した資料を用いて、小企画を年に数回
行っている。その他、昔の暮らしの道具や土器のハンズオン
コーナーを充実させた。

(山本剛史)



展示風景

4

●国芳一門の浮世絵師たち

2023/7/22～10/9

歴史資料展示室の企画展示スペースで開催した、特別展「最後の浮世絵師 月岡芳年」展の関連展示。

月岡芳年の師である歌川国芳とその弟子たちの作品を紹介した小展示である。

当館が保管している浮世絵コレクションの中から歌川国芳をはじめ、弟子の歌川芳虎、落合芳幾、月岡芳年、楊洲周延の作品を展示した。当館の浮世絵コレクションは、総じて美人画が多い。そのため、5名の絵師の描く人物画の特徴を比較する機会にもなった。

(山本剛史)



歌川国芳《四季遊観納涼のほたる》1845-46年 個人蔵

●ちょっとむかしの暮らし展

—昭和の生活用品たち—

2023/10/28～2024/3/24 (2/5～9、2/19～3/4休館)

歴史資料展示室の企画展示スペースで開催した小展示。

大きい氷を入れてその冷気で食材を冷やす「氷冷蔵庫」や、ハエやほこりの侵入や腐敗から料理を守る「蠅帳」、「真空管ラジオ」などを展示した。昭和という長い時代の中で人々がどのような生活道具を使用していたかを紹介した。

(山本剛史)



展示風景

具体美術協会／芦屋

1954年、「具体美術協会（具体）」は兵庫県芦屋市で結成されました¹。戦前から前衛美術のパイオニアとして活躍していた吉原治良をリーダーに、若手作家たちが精力的に活動した「具体」は日本の戦後美術の出発点として世界で認知される美術団体です。当館では「具体」の会員だった作家38名の作品を収蔵しています²。

「具体」の名を一躍有名にしたのは、「真夏の太陽にいどもモダンアート野外実験展」（1955年7月25日～8月6日、芦屋公園。以降「野外実験展」）と「野外具体美術展」（1956年7月27日～8月5日、芦屋公園。以降「野外展」）です。この度、そこで展示された作品の位置関係を調べる機会がありました³。展覧会当時の展示図面は発見されていませんが、「具体」会員のアーカイブや芦屋市の資料から辿ってみることで、新たに発見できた事実があるので、ここに報告します。

二つの野外展の会場となった芦屋公園は、国道43号線以南の芦屋川東側に位置し、1907年に芦屋遊園地として開園したのがその始まりです。その後1915年から16年にかけて、芦屋川の改修工事に伴い大きく改造され、1917年にその一部が芦屋公園として整備されています。最初に、南北に長い芦屋公園のどの場所で展覧会が開催されたのか、確認してみましょう。

公園の中央に位置する芦屋公園テニスコートは、1956年秋に予定されていた第11回国民体育大会（兵庫国体）の競技会場として建設が予定され、1955年7月から工事が着工し、1956年9月に完成しました⁴。一方、芦屋公園の南端の遊具のある児童公園は、1940年に竣工したようです⁵。二つの野外展の記録写真には、公園の遊具は写っていません。これらの歴史から、南側の児童公園、芦屋公園テニスコートの場所は「野外実験展」「野外展」の会場ではないことがわかります。また、「野外実験展」を紹介する新聞記事には、会場の場所として「芦屋川東側松林（永保橋以南ぬえ塚橋以北約三千七百坪）」と記載されています⁶。あわせて、「野外展」の当時の案内はがきには、展覧会名や会期ともに「芦屋川東松林3700坪」「夜間照明10時迄」と記載されています。このことから、二つの野外展は、現在はバス停で名を残す永保橋付近から南に下り、テニスコート北西に位置する鶴塚橋までの芦屋公園の区域で開催されたと推定できます。

次に、会場となった芦屋公園のどの位置に作品が展示されたのか考えてみましょう。

この「野外実験展」「野外展」の展示状況を知ることができる資料があります。当館では2015年に「阪神沿線の文化110年 モダン芦屋 クロニクルアート、ファッション、建築からたどる芦屋の芸術」（5月23日（土）～8月2日（日））展を開催しましたが、その準備のため『美術手帖』1967年7月号から12月号まで連載された白髪一雄「冒険の記録 エピソードでつづる具体グループの12年」挿絵原画（1967年）の調査に尼崎市総合文化センターを訪れました。同センターには、挿絵群の中に雑誌未掲載のものと考えられる原画が数点保管されており、その中に「野外実験展」「野外展」の会場を描いた原画がありました。本原画2点は公園内の出品作品が描かれたものですが、松の枝が緑の紙でコラージュされていたり、松の木に顔が描かれていたり、とても愛らしいテイストで表現されています。これら2点は『美術手帖』に掲載された原画とはサイズが異なるもの同じスタイルで描かれていることから、同時期に描かれた可能性が高いと推測でき、それぞれの野外展の時期に合わせて描いたというよりも、白髪が記憶を辿って描いたと考える方が妥当でしょう。記憶をもとに描いたと考えられる原画を、二つの野外展の当時の記録写真（「具体美術資料委員会旧蔵資料」大阪中之島美術館蔵）と見比べると、描かれていない作品はあるものの、作品の位置関係は大きく異なっていないようにみえます。例えば、「野外展」で発表された田中敦子《舞台服》（1956年）が映る記録写真の背景には、永保橋⁷と考えられる橋が写っています。また、芦屋川の西側から芦屋公園を撮影した別ショットの記録写真からは《舞台服》が芦屋公園の西側沿いに設置されていることがわかります。さらに、「野外展」の記録動画（1956年、モノクロ、カラー。大阪中之島美術館蔵）から、山崎つる子《三面鏡》（1956年）の裏面に山崎の蚊帳状の作品が写りこんでいたり、白髪一雄《○》（1956年）が近くに展示されていることがわかります。この原画に描かれた作品群の位置は、残された記録写真や映像と同様に、当時の作品の位置関係を探るための重要な手がかりとなることがわかりました。

このように、改めて調べることで、新たに確認できる情報も少なくありません。小さな発見や再確認の積み重ねの研究成果を、展覧会という場でも紹介していきたいと思っています。

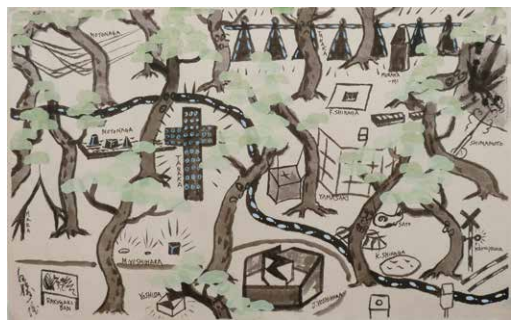
大槻晃実（当館学芸員）

註

- 1 具体美術協会の結成時期は諸説ある。会員の上前智祐の日記「自画道」による1954年8月頃という説、「具体」という名称が考案されるきっかけとなった機関誌「具体」が発行された12月とする説がある。
- 2 具体美術協会に在籍していた作家は59名（『具体資料集—ドキュメント具体1954-1972』、芦屋市立美術館、1993年の情報より）。
- 3 横尾忠則現代美術館学芸課長の山本淳夫氏の呼びかけで、2023年夏に兵庫県立美術館の鈴木慈子学芸員とともに「具体」の記録写真と照合しながら、芦屋公園の現地調査を行った。その際、芦屋市生涯学習課や道路公園課に情報提供をいただき、松や公園内の道の位置が当時と大きな変化はなかったことがわかった。
- 4 『芦屋市史』では、芦屋公園テニスコート（芦屋市史では「松浜公園テニスコート」と記載）は「昭和三十一年第十一回国民体育大会（国体）の公式テニス競技会場として、（中略）開設された。」とある（『芦屋市史 続篇』芦屋市役所、2010年 pp.602-603）。このことから、1956年10月の開催に際してオープンしたと解釈できるため、1955年の野外実験展の会場がテニスコートの位置であったかもしれないという推測もあったが、1955年7月から1956年9月にわたりテニスコートの工事が行われていたことが確認でき、この地域での開催は不可能であることがわかった。工事状況は「広報あしや」（1955年1月20日（3）、5月20日（2）、7月20日（1）、9月20日（2）、12月20日（2）、1956年2月20日（2）、5月20日（2）、7月20日（1）、9月20日（2）、10月20日）に詳しい。
https://www.city.ashiya.lg.jp/kouhou/kensaku/s24/08_20.html（2024年1月10日アクセス）
- 5 芦屋公園の成り立ちや現在に至るまでの経緯、芦屋川に架かる橋については『芦屋今むかし：市制施行 50周年記念写真集』（芦屋市、1990年）に詳しい。
- 6 「真夏の太陽にいども 芦屋で野外モダンアート実験展」『産経新聞』（1955年7月7日、朝刊・阪神版）
- 7 永保橋は、第二阪神国道（国道43号）の開通にともない、1961年に芦屋川橋に架け替えられたため、現在はバス停にその名前を残すのみ。なお、記録写真に写る橋が、テニスコート近くの鶴塚橋である可能性も考えたが、当時すでにテニスコートが建設されており、記録写真の角度から鑑みて永保橋であると判断した。



白髪一雄〈「真夏の太陽にいどもモダンアート野外実験展」会場図〉
制作年不詳 水彩・コラージュ・紙 30.0×48.3cm



白髪一雄〈「野外具体美術展」会場図〉
制作年不詳 水彩・コラージュ・紙 30.0×48.3cm
いずれも、白髪久雄氏蔵（公益財団法人尼崎市文化振興財団寄託）

画家と詩人の沖縄旅行 — 伊藤継郎《沖縄デッサン》をめぐって

特別展「芦屋の美術、もうひとつの起点 — 伊藤継郎」(2023年4月15日～7月2日)で展示した、伊藤継郎の《沖縄デッサン》(1940年、画像①。以下「本作」)。伊藤が親しく交流した画家・小磯良平(1903-1988)、詩人・竹中郁(1904-1982)と、1940年に沖縄へ旅行した際に描かれたものです。この旅で小磯が描いた女性像《沖縄風俗》(1940年、画像②。神戸市立小磯記念美術館蔵)と併せて展示しました¹⁾。

本作の調査にあたり、この旅の最中に小磯が画家・内田巖(1900-1953)へ宛てたはがきの存在を、小磯記念美術館よりご教示いただきました(消印:1940年2月20日、同館蔵)。内田は小磯とともに新制作派協会を立ち上げた1人で、1941年に伊藤も本会へ加わります。

本稿ではこのはがきを読み解きながら、彼らの沖縄旅行について振り返ります。

はがきには「突然13日出帆の浮島丸で沖縄に来ました。ここは初夏です。いいところです(中略)同行は竹中、伊藤継郎の二人二科出品の竹谷、加治屋の二人も来てある(後略)」とあります。「突然」とありますが、当時、沖縄へは気軽に行けたのでしょうか?

元々独立国家であった「琉球王国」(1429-1879)は江戸～明治時代にかけて日本に併合され、1879年には沖縄県が設置されます。1884年、大阪商船株式会社が大阪・那覇間を10日間かけて結ぶ旅客船の運行を開始し、これ以降、人や物の往来が増えていきました。そして、1937年には神戸・那覇間を2泊3日で運航する「浮島丸」が就航し²⁾、神戸港を窓口日本本土と沖縄間の距離がぐっと短縮されました。大阪商船の広報誌『海』によると、伊藤たちも利用したこの船は毎月5回運航され、片道10円から利用できたようです³⁾。本船就航記念に開始されたパッケージツアー「沖縄視察団」も人気を呼び、伊藤たちが沖縄を訪れた1940年はまさに、沖縄観光が加速していく時期であったのです。

続いて、はがきに記されている「二科出品の竹谷、加治屋」とは、竹谷富士雄(1907-1984)と加治屋隆二(1908-没年不詳)であると考えられます。加治屋は『みつゑ』1940年8月号に「沖縄旅行」というエッセイを寄せ、「お正月のお雑煮をあわてて食べる」と私は再び懐かしい沖縄航路の客となった」と綴ります⁴⁾。「再び」

とありますが、彼は1938年に藤田嗣治(1886-1968)、そして竹谷富士雄と沖縄を初訪問していました⁵⁾。竹谷は二科会で活躍した画家で、一時藤田に師事しており、1941年には藤田とともに二科会を退き新制作派協会に加入しています。

このように1930年代後半から40年代にかけて、多数の芸術家たちが沖縄を訪れました。芸術家にとって、写生旅行などを通して新たなモチーフを得ることは、制作を進めていくための大切な過程です。彼らにとって沖縄は当時、「日本の内地でありながら遠く南に偏在するため、独特の南洋情緒を湛えている沖縄島」(『海』第101号、1940年2月)と沖縄視察団の広告にあるように、独自の文化が色濃く残る、格好の取材先だったのでしょう。

先述の『海』には画家や文化人の旅行記が寄せられ、観光地の様子や特産品を伝えています。また、伊藤が本作を含む10作品を、二科会の画家・服部正一郎(1907-1995)との二人展(1940年4月23～26日 資生堂画廊・東京)に出品したように、画家たちが沖縄をモチーフにした作品を展覧会で発表し、美術界において沖縄への関心がさらに高まる、というような循環もあったことでしょう。

伊藤ら3人が沖縄に向かう「浮島丸」の船中では、出発前から沖縄についての知識があった竹中がずいぶんと説明してくれたと、小磯が回想しています⁶⁾。竹中は旅行後、『海』(第104号、1940年5月)に、首里の町を歩く自身を書いた詩「首里月映」を寄せ、この最後を「(前略)旅人のポケットには一本の万年筆がはさまれていて、そのなかに一ぱいつまったインクが血のように騒いでいた(後略)」と締めくくります。後に竹中は詩集『龍骨』(湯川弘文社、1944年)第3章「首里遺暈」に本作を含む8作品をまとめ、本書のカバーには、この旅で入手した手拭いの図柄を用いています⁷⁾(画像③)。

以上のように、伊藤と小磯、竹中のこの沖縄旅行は、画家・詩人としての制作のモチーフを求め、日本本土からの沖縄観光が加速していく時流に乗って実現したものでした。彼らが残した作品からは、芸術家が新たなモチーフに心躍らせ、ひたむきに制作する姿を、窺うことができます。

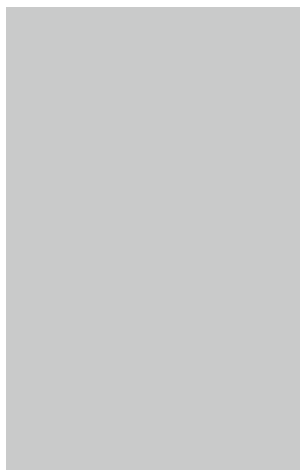
川原百合恵(当館学芸員)

註

- 1 本作は従来1938年制作とされていたが、本展準備の調査にあたり、1940年制作と改められた。
- 2 沖縄県公文書館、2020年「所蔵資料展 沖縄観光のあゆみ」沖縄県公文書館ホームページ https://www.archives.pref.okinawa.jp/event_information/past_exhibitions/10134#1(参照2024年1月12日)
- 3 「主要内航船定期と船賃」『海』第100号、大阪商船株式会社、1940年1月、p.55
- 4 『みつゑ』第429号、1940年8月、pp.195-198
宮城篤正「試案・沖縄絵画史年表」
- 5 「沖縄県立博物館紀要」第8号、1982年、pp.41-54
- 6 小磯良平(聞き手 足立巻一)「稀有に心のきれいな人 詩人竹中郁さんを偲ぶ」『木 梅田画廊・梅田近代美術館ニュース』No.15、梅田画廊、1982年7月
- 7 足立巻一「解題」『竹中郁全詩集』角川書店、1983年3月、p.735



①伊藤継郎《沖縄デッサン》1940年
木炭・パステル・水彩・紙 個人蔵



②小磯良平《沖縄風俗》1940年
鉛筆・紙 神戸市立小磯記念美術館蔵



③竹中郁「龍骨」表紙 湯川弘文館、1944年
鉛筆・紙 神戸市立小磯記念美術館蔵

芦屋廃寺の基壇

芦屋市には7世紀後半の白鳳時代に建てられた寺院が存在しました。その寺院は文献記録がなく、発掘調査で初めて存在が確認できたため、地名+廃寺で芦屋廃寺と呼ばれています。

古代寺院には塔や金堂といった建物を高く見せるためや、より立派に見せるために基壇という土山を作ります。その基壇をより強固にするためや、美しく見せるために石や瓦を用いて装飾を行います。その装飾のことを基壇化粧といいます。

芦屋廃寺の基壇化粧は「塼(せん)」と呼ばれる古代のレンガを積み重ねて造る、塼積基壇を採用していたとされています。基本的に塼積基壇は長方体の塼を平積みした形であることが多いです。芦屋廃寺の塼は断面L字型のものや割り込み加工の施されたものなど、一般的な長方体のレンガとは異なる形状のものが数多く見つかっています。これらの塼を組み合わせていくと塼上積基壇と同じ見た目の基壇化粧となります。塼上積基壇とは、均一な大きさで直角に加工した石材を規則的に積み上げた基壇化粧のことをいいます。四天王寺や法隆寺、国分寺といった格式の高い寺院の基壇化粧に使われているため、塼上積基壇は基壇化粧の中でも格式の高いものとされています。

ここで一疑問が出てきます。芦屋では六甲山から花崗岩と呼ばれる石が採れます。この六甲山の花崗岩は大阪城の石垣に用いられています。市内には大阪城までたどり着くことなく放置された石が現在でも数多く残されています。つまり、芦屋は石材を採取し、使用するには困らない土地のはずです。それにもかかわらず、

なぜ石材を使用した基壇化粧を採用しなかったのでしょうか。それは花崗岩の性質が関わっています。

花崗岩は、地下深くでマグマがゆっくりと冷え固まってできた硬質な石です。現代では様々な加工を施されて使用されていますが、古代ではその硬度から加工が難しい石でした。花崗岩の加工が容易になったのは、中世の鎌倉時代頃です。芦屋市内の花崗岩製の石造物も、古墳の石室以外では中世以降につくられたものが多いです。古代寺院の塼上積基壇に用いられていた石材は、古代の技術でも加工が比較的容易であった凝灰岩でした。

芦屋廃寺ではなぜ塼で塼上積基壇の形を建造しようとしたのでしょうか。塼は、型に粘土を入れて作成するため、形状・規格が同一のものをいくつも作ることが出来ます。上述の通り、塼上積に使用する石材は均一規格で直角に切った石材です。塼は塼上積を作る際に適した要素を持った材料といえます。そのため、基壇化粧の代用部材として選ばれたと考えられます。現代のレンガ積みのような長方体の塼を平積みする簡単な方法を行わず、特殊な形状の塼を用いて塼上積基壇状を建造したのは、少しでも芦屋廃寺を格式高い寺院に見せるための工夫だと考えられます。

他にもなぜ塼積基壇を採用したのか、塼積基壇の創建年代や、塼自体の年代がいつなのかなど、芦屋廃寺の塼に関わる疑問というのは尽きません。それだけ芦屋廃寺の塼というものは解明されておらず、研究の余地がある資料といえます。上記の芦屋廃寺の塼についての疑問は、今後別の機会で検討していこうと思います。

山本剛史(当館学芸員)

参考文献

芦屋市教育委員会「芦屋廃寺址」1970年

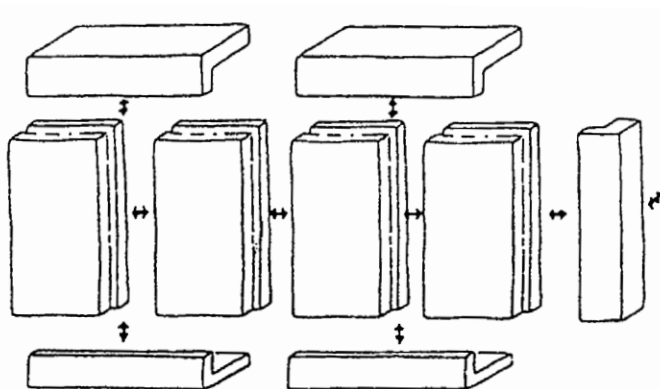
芦屋市教育委員会「平成11・12年度国庫補助事業芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本調査—実績報告書集」2006年



割り込み加工塼



断面L字型塼



塼使用模式図
(芦屋市教育委員会2006より引用)

複弁蓮華文軒丸瓦 芦屋廃寺出土 白鳳時代

芦屋廃寺から出土した瓦の中で最も古い文様を持つ。奈良の法隆寺で使われていた瓦と同じ文様である。
歴史資料展示室常設展で展示中。



8

2024年度の展覧会予定

2024/4/13～6/9	コレクション特集「具体美術協会／芦屋」「アプローチ!アーティストに学ぶ世界のみかた」
2024/6/22～8/25	創立100周年記念 信濃橋洋画研究所 一大阪にひとつ美術の花が咲く—
2024/9/14～11/17	今井祝雄展 (仮称)
2024/11/30～2025/2/9	芦屋の文化財再発見 —最新のヨドコウ迎賓館温室跡発見まで—
2025/2/15～2/23	第42回 芦屋市造形教育展
2025/3/1	とあるひ 平井真美子 (仮称)
2025/3/15～5月中旬 (予定)	コレクション展 (仮称)
各展覧会に準ずる	歴史資料展示室常設展

美術博物館ホームページ <https://ashiya-museum.jp> | X @ashiyabihaku
